おくのほそ道

911.3
オ

月日ハ百代の過客にして行
かふ年も又旅人也舟の上に生涯
をうかへ馬の口とらえて老をむ
かふる物ハ日〻旅にして旅を栖とす
古人も多く旅に死せるあり
予もいつれの年よりか片雲の風に
さそはれて漂泊の思ひやます
海濱にさすらへ去年の秋江上の

破屋に蜘の古巣をはらひて
やゝ年も暮春立る霞の空に
白川の関こえんとそゞろ神の物に
つきて心をくるはせ道祖神のまね
きにあひて取もの手につかずもゝ
引の破をつゞり笠の緒付かえて三里
に灸すゆるより松島の月先心にかゝ
りて住る方は人に譲り杉風

が別墅に移るに

草の戸も住替る代ぞひなの家

面八句を庵の柱に懸置弥生も
末の七日明ぼのゝ空朧々として月は
在明にて光おさまれる物から
不二の峰幽にみえて上野谷中の
花の梢又いつかはと心ぼそしむつま
じきかぎりは宵よりつどひて舟に

乗て送る千しゆと云所にて船
をあかれは前途三千里のおもひ
胸にふさかりて幻のちまたに離
別の泪をそゝく

行春や鳥啼魚の目は泪

是を矢立の初として行道なを
すゝます人々は途中に立ならひ
て後かけのみゆるまてはと見送なるへし

ことし元禄二とせや奥羽長途
の行脚只かりそめに思ひたちて
呉天に白髪の恨を重ぬといへ
共耳にふれていまた目に見ぬさかひ
若生て帰らはと定なき頼の末
をかけ其日漸早加と云宿に
たとり着にけり痩骨の肩に
かゝれる物先くるしむ只身すから

と出立侍るを帋子一衣ハ夜の
防きゆかた雨具墨筆のたくひ
あるハさりかたき餞なとしたるハ
さすかに打捨かたくて路次の煩と
なれるこそわりなけれ
室の八嶋に詣す同行曾良か曰此
神ハ木の花さくや姫の神と申て
富士一躰也無戸室に入て焼給
ちかひのみ中に火々出見のみこと
生れ給ひしより室の八嶋と申又
煙を読習し侍るもこの謂也将
このしろといふ魚を禁す縁記
の旨世に伝ふ事も侍し
卅日日光山の梺に泊るあるしの
云けるやう我名を仏五左衛門と云
萬正直を旨とする故に人かくハ

申侍まゝ一夜の草の枕も打解て
休み給へといふいかなる仏の濁世塵土に
示現してかゝる桑門の乞食順礼
ごときの人をたすけ給ふにやと
あるじのなす事に心をとゞめて
みるに唯無智無分別にして正
直偏固の者也剛毅木訥の仁に
近きたぐひ気稟の清質尤

尊ぶべし
卯月朔日御山に詣拝す往昔
此御山を二荒山と書しを空海
大師開基の時日光と改給ふ千
歳未来をさとり給ふにや今此
御光一天にかゝやきて恩沢八荒
にあふれ四民安堵の栖穏なり
猶憚多くて筆をさし置ぬ

なつまうし素翁の説のよりの文
黒髪山ハ霞かゝりて雪いまた
白し
剃捨て黒髪山に衣更　曾良
曾良ハ河合氏にして惣五郎と云
芭蕉の下葉に軒をならへて予か
薪水の労をたすく此たひ
松しま象潟の眺共にせん事を
悦ひ且ハ羇旅の難をいたハらんと
旅立暁髪を剃て墨染にさま
をかへ惣五を改て宗悟とす
仍て黒髪山の句あり衣更の二
字力ありてきこゆ
廿余丁山を登つて瀧有岩洞の
頂より飛流して百尺千岩の
碧潭に落たり岩窟に身を

ひそミ入て滝の裏よりみれハう
らみの瀧と申伝侍る也
暫時ハ瀧に籠るや夏の初
那須の黒はねと云所に知人あれハ
是より野越にかゝりて直道をゆ
かんとす遥に一村を見かけて
行に雨降日暮る農夫の家
に一夜をかりて明れハ又野中
を行そこに野飼の馬あり
草刈おのこになけきよれハ野夫
といへともさすかに情しらぬには非す
いかゝすへきやされとも此野ハ縦横
にわかれてうゐ〳〵敷旅人の道
ふみたかえんあやしう侍れハ此馬
のとゝまる所にて馬を返し給へと
かし侍ぬちいさき者ふたり馬の

跡したひてはしる独ハ小姫にて
名をかさねといふきゝなれぬ名の
やさしかりけれハ
かさねとハ八重撫子の名成へし　曾良
頓て人里に至れハあたひを鞍
つほに結付て馬を返しぬ
黒羽の館代浄坊寺何かしの方に
音信る思ひかけぬあるしの悦ひ

日夜語つゝけて其弟桃翠なと
いふか朝夕勤とふらひ自の家に
も伴ひて親属の方にもまねかれ
日をふるまゝにひとひ郊外
に逍遥して犬追物の跡を一見し
那須の篠原をわけて玉藻の前の
古墳をとふそれより八幡宮に詣
与市扇の的を射し時別しては

我国氏神正八まんとちかひしも
此神社にて侍と聞ば感應殊
しきりに覚えらる暮れば桃翠
宅に帰る
修験光明寺と云有そこにまね
かれて行者堂を拝す
夏山に足駄を拝む首途哉
当国雲岸寺のおくに仏頂和尚

山居跡あり
竪横の五尺にたらぬ草の庵
むすぶもくやし雨なかりせば
と松の炭して岩に書付侍りと
いつぞや聞え給ふ其跡みんと雲岸
寺に杖を曳ば人々すゝんで共に
いざなひ若き人おほく道のほど
打さはぎておぼえず彼麓に到る

とハるくあゆみしきて谷径
あをき松杉生て苔したゝりて卯
月の天今猶さむし十景尽る所
橋をわたりて山門に入
さてかの跡ハいつのほとにやと後の
山によちのほれハ石上の小菴岩
窟にむすひかけたり妙禅師の死関
法雲法師の石室をみるかことし

木啄も庵ハやふらす夏木立
とおもひつゝくるを柱に残し
是より殺生石に行館代より
馬にて送らる此口付のおのこ短冊
得させよと乞やさしき事を
望侍るものかなと
　野を横に馬牽むけよほとゝきす
殺生石ハ温泉の出る山陰に有

遥に松杉黒く苔したゞりて卯
月の天今猶寒し十景尽る所
橋をわたつて山門に入
さてかの跡はいづくのほどにやと後の
山によぢのぼれば石上の小庵岩
窟にむすびかけたり妙禅師の死関
法雲法師の石室をみるがごとし

木啄も庵はやぶらず夏木立
とりあへぬ一句を柱に残し
是より殺生石に行館代よりう
まにて送らる此口付のおのこ短冊
得させよと乞やさしき事を望
侍るものかなと
野を横に馬牽むけよほとゝぎす
殺生せきは温泉の出る山陰にあ

石の毒気いまたほろひす蜂
蝶のたくひまさこの色のみえぬほと
かさなり死す又清水なかるゝの
柳は蘆野の里にありて田の畔
に残る此所の郡守戸部某の
此柳みせはやなと折々にの給ひ
聞え給ふをいつくのほとにやと思ひ
しを今日此柳のかけにこそ

立より侍りつれ

田一枚植て立去る柳かな

心もとなき日かすかさなるまゝに白川
の関にかゝりて旅心定りぬいかて
都へと便求しも断也中にも
此関は三関の一にして風騒の人
心をとゝむ秋風を耳に残し
紅葉を俤にして青葉の梢

はれ也卯の花の白妙に茨の
花の咲そひて雪にもこゆる心
地ぞする古人冠を正し衣装を
改し事など清輔の筆にもとゞめ
置れしとぞ

卯の花をかざしに関の晴着かな　曽良

とかくして越行まゝにあぶくま
川を渡る左に会津根高く右に
岩城相馬三春の庄常陸下野
の地をさかひて山つらなるかげ
沼と云所を行に今日は空曇て物
影うつらずすか川の駅に等窮
といふものを尋て四五日とゞめら
る先白河の関いかにこえつるやと
問長途のくるしみ身心つかれ且は
風景に魂うばはれ懐旧に腸を

断てはか〻しう思ひめくらさす

風流の初やおくの田植うた

無下にこえんもさすかにと語れは脇

第三とつゝけて三巻となしぬ

此宿の傍に大きなる栗の木陰

をたのみて世をいとふ僧有橡ひ

ろふ太山もかくやと閑に覚られて

ものに書付侍る其詞

栗といふ文字ハ西の木と書て
西方浄土に便ありと行基菩薩
の一生杖にも柱にも此木を用
ひ給ふとかや

世の人の見付ぬ花や軒の栗

等窮か宅を出て五里計檜皮

の宿を離れてあさか山有路より

近し此あたり沼多しかつみ刈比

もやゝ近うなれはいつれの草を

花かつみとは云そと人〳〵に尋侍れ
とも更知人なし沼を尋人にとひ
かつみ〳〵と尋ありきて日は
山の端にかゝりぬ二本松より右に
きれて黒塚の岩屋一見し
福島に宿るあくれハしのふもち摺
の石を尋て忍ふのさとに行
はるか山陰の小里に石半土に埋て
有里の童への来りて教ける
昔ハ此山の上に侍しを往来の人の
麦草をあらして此石を試侍を
にくみて此谷につき落せハ石の
面下さまにふしたりと云さもあ
るへき事にや

早苗とる手もとや昔しのふ摺

月の輪のわたしを越て瀬の上と

云宿に出　佐藤庄司か旧跡は
左の山際一里半斗に有飯塚の里
鯖野と聞て尋ね尋ね行に
丸山と云に尋あたる是庄司か旧館也麓
に大手の跡なと人の教ゆるにまかせ
て泪を落し又かたはらの古寺に
一家の石碑を残す中にも二人の
嫁かしるし先哀也女なれとも
かひかひしき名の世に聞えつる物
かなと袂をぬらしぬ堕涙の石碑
も遠きにあらす寺に入て茶
を乞へは爰に義経の太刀弁慶か
笈をとゝめて什物とす

笈も太刀も五月にかされ帋幟

五月朔日の事也其夜飯塚に
とまる温泉あれは湯に入て宿をか

新しく出世して甚だとなくてあやし
き貧なれど灯しるべれなかなか
里の犬にほえけしこ旅宿とてなき
外に出て雷鳴雨ふりに
降てみちもまよひ金堂に
として眠るにも能はず一
むかしは消入ましきまでの
こともやましかりし文旅なる

行者の余生心も才ならずて
業おの程くせよとなるれ
実となしくて病気なる
ともし羇旅鳴土の行脚捨身
無常の観念道路にたちえ天
の命るまで身力御おはし
路経横し渉て伴生の大木
下をとけ錦褶白石の如くとも

笠嶋の郡に入れハ藤中将実方
の塚ハいつくのほとならんと人にとへハ
是よりはるか右に見ゆる山際
の里をみのわ笠嶋と云道祖神
の社かたみの薄今にありと教ゆ
此比の五月雨に道いとあしく
身つかれ侍れハよそなから眺やりて
過るに蓑輪笠嶋も五月雨
のおりにふれたりと

笠嶋ハいつこさ月のぬかり道

岩沼に宿る

武隈の松にこそめさむる心地ハすれ
根ハ土際より二木にわかれて昔
の姿うしなハすとしらる先能因
法師思ひ出往昔むつのかみにて
下りし人此木を伐て名取川

の橋杭にせられたる事なと
あれはにや松ハ此たひ跡もなしとハ
詠たり代々あるハ伐あるひハ植
継なとせしと聞に今将千歳
のかたちとゝのひてめてたき
松のけしきになん侍し

武隈の松みせ申せ遅桜と挙白
といふものゝ餞別したりけれハ

桜より松ハ二木を三月越シ
名取川を渡て仙台に入あやめ
ふく日也旅宿をもとめて四五日
逗留す爰に画工加右衛門と云
ものあり聊心ある者と聞て知る人
になる此者年比さたかならぬ
名ところを考置侍れはとて
一日案内す宮城野の萩茂り

あひて秋のうれひいやまさりく
出田よと輝てしか国ハいつとても
暮くる也日影もかゝる松の梢に
入て宮をも木の下とこゝろ苦し
うく君妙けれハこゝにあまつ
こゝのきとへまかれ菩師菅天神
のれ給るを被て寺ハそれぬれ
松梅陰よ而て盡てなく達

旦緋の袴給ひける草鞋豆
縁すまれハ木風流のしきりの
家にまりて其実を残す
あやめ州より移人世の緒の終
ゐの畫圖にかきて世にまりけりハ
おくの御代の際に十首の
若を今もつくて十首の若菜
を摘て國ちうし献すとなり

あひて秋の気色思ひやらるゝ
玉田よこ野つゝしか岡はあせひさく
ころ也日影ももらぬ松の林に
入て爰を木の下と云とそ昔も
かく露ふかけれはこそみさふらひ
みかさとはよみたれ薬師堂天神
の御社なと拝て其日はくれぬ猶
松嶋塩かまの所々画に書て送

且紺の染緒つけたる草鞋二
足餞すされはこそ風流のしれもの
爰に至りて其実を顕す

あやめ艸足に結ん草鞋の緒

かの画図にまかせてたとり行は
おくの細道の山際に十符の
菅有今も年々十符の菅菰
を調て国守に献すと云り

壷碑　市川村多賀城ニ有

つぼの石ぶみハ高サ六尺余横三尺計
歟苔を穿て文字幽也四維国
界之数里をしるす此城神亀元
年按察使鎮守府将軍大野朝臣
東人之所里也天平宝字六年参
議東海東山節度使同将軍
恵美朝臣獦修造而十二月朔日

と有聖武皇帝の御時に当れり
むかしよりよみ置る歌枕おほく
語伝ふといへども山崩川流て道
あらたまり石は埋て土にかくれ
木は老て若木にかはれば時移り
代変じて其跡たしかならぬ事
のみを爰に至りて疑なき千
歳の記念今眼前に古人の心

を閲す行脚の一徳存命の
悦び羇旅の労をわすれて
泪も落るばかり也
それより野田の玉川沖の石を尋ぬ
末の松山は寺を造て末松山といふ
松のあひあひ皆墓はらにてはねを
かはしえだをつらぬる契の末も終
はかくのごときと悲しさも増りて

塩がまの浦に入相のかねを聞
五月雨の空聊はれて夕月夜幽に
籬が島もほど近し蜑の小舟
こぎつれて肴わかつ声々に
つなでかなしもとよみけん心もしられて
いとゞ哀也其夜目盲法師の
琵琶をならして奥上るりと云
ものをかたる平家にもあらず舞

もあらすひなひたる調子うち
上て枕ちかうかしましけれとさ
すかに邊土の遺風忘れさるもの
から殊勝に覺らる早朝塩かま
の明神に詣國守再興せられ
て宮柱ふとしく彩椽きらひや
かに石の階九仭に重り朝日あ
けの玉かきをかゝやかすかゝる道の
果塵土の境まて神霊あらた
にましますこそ吾國の風俗なれと
いと貴けれ神前に古き寶燈
ありかねの戸ひらの面に文治三年和泉
三郎寄進と有五百年來の俤
今目の前にうかひてそゝろに珍
し渠は勇義忠孝の士也佳命
今に至りてしたはすといふ事なし

誠人能道を勤義を守へし
名もまた是にしたかふと云り日既
午にちかし船をかりて松嶋にわたる
其間二里余雄嶋の磯につく
抑ことふりにたれと松嶋ハ扶桑第
一の好風にして凡洞庭西湖を恥す
東南より海を入て江の中三里
浙江の潮をたゝふ嶋々の数を

尽して欹ものハ天を指ふすものハ
波に匍匐あるハ二重にかさなり
三重に畳て左にわかれ右につ
らなる負るあり抱るあり児孫愛すか
ことし松の緑こまやかに枝葉
汐風に吹たはめて屈曲をのつから
ためたるかことし其気色窅然
として美人の顔を粧ふちはやふる神

神のむかし大山すみのなせるわざ
にや造化の天工いづれの人か筆
をふるひ詞を尽さむ
雄嶋が礒は地つゞきて海に出たる
島也雲居禅師の別室の跡
坐禅石など有将松の木陰に
世をいとふ人も稀〳〵見え侍りて
落穂松笠など打けふりたる草の

庵閑に住なしいかなる人とは
しられずながら先なつかしく立寄ほどに
月海にうつりて昼のながめ
又あらたむ江上に帰りて宿を
求れば窓をひらき二階を作て
風雲の中に旅寝するこそ
あやしきまで妙なる心地はせらるれ
松嶋や鶴に身をかれ
ほとゝぎす
曾良

予ハ口をとちて眠らんとしていね
られす旧庵をわかるゝ時素堂
松嶋の詩あり原安適松かうら
しまの和歌を贈らる袋を解て
こよひの友とす且杉風濁子か
発句あり
十一日瑞岩寺に詣当寺三十二
世の昔真壁の平四郎出家して

入唐帰朝の後開山す其後に
雲居禅師の徳化に依て七堂
甍改りて金壁荘厳光を輝
仏土成就の大伽藍とはなれりける
彼見仏聖の寺はいつくにやとしたはる
十二日平和泉と心さしあねはの松
緒たえの橋なと聞伝て人跡稀
に雉兎蒭蕘の往かふ道そこ

予ハ口をとちて眠らんとしていね
られす旧庵をわかるゝ時素堂
松島の詩あり原安適松かうら
しまの和哥を贈らる袋を解て
こよひの友とす且杉風濁子か
発句あり
十一日瑞岩寺に詣当寺三十二
世の昔まかへの平四郎出家して
入唐帰朝の後開山す其後に
雲居禅師の徳化に依て七堂
甍改りて金壁荘厳光を輝
仏土成就の大伽藍とはなれりける
彼見仏聖の寺はいつくにやとしたはる
十二日平和泉と心さし あねはの松
緒たえの橋なと聞伝て人跡稀
に雉兎蒭蕘の往かふ道そこ

ともかうも行に路ふみたかへて
石の巻といふ湊に出こかね
花咲とよみて奉たる金花山海上
に見わたし数百の廻船入江につと
ひ人家地をあらそひて竈の
煙立つゝけたり思ひかけす斯
る所にも来れる哉と宿からんとすれ
と更に宿かす人なし漸まとし
き小家に一夜をあかして明れは
又しらぬ道まよひ行袖のわた
り尾ふちの牧まのゝ萱はらなと
よそめにみて遥なる堤を行心
細き長沼にそふて戸伊摩と云
所に一宿して平泉に到る其間廿
余里ほとゝおほゆ
三代の栄耀一睡の中にして

大門の跡ハ一里こなたに有秀衡が跡ハ田野に成て金鶏山のミ形を残す先高館にのぼれバ北上川南部より流るゝ大河也衣川ハ和泉が城をめぐりて高館の下にて大河に落入康衡等が旧跡ハ衣が関を隔て南部口をさし堅め夷をふせぐとみえたり偖も義臣すぐつて此城にこもり功名一時の叢となる国破れて山河あり城春にして草青ミたりと笠打敷て時のうつるまで泪を落し侍りぬ

夏草や兵どもが夢の跡

卯の花に兼房みゆる白毛かな　曽良

兼て耳驚したる二堂開帳

す経堂ハ三将の像をのこし
光堂ハ三代の棺を納め三尊の
佛を安置す七宝ちりうせて
珠の扉風にやふれ金の柱霜
雪に朽て既頽廃空虚の叢
と成へきを四面新に囲て甍
を覆て風雨を凌暫時千歳
の記念とハなれり

五月雨の降のこしてや光堂

南部道遥にみやりて岩手の
里に泊る小黒崎みつの小嶋を
過てなるこの湯より尿前の関
にかゝりて出羽の国に越んとす
此路旅人稀なる所なれは
関守にあやしめられて漸として
関をこす大山をのほつて日既

日既暮けれは封人の家を見かけ
て舎を求む三日風雨あれ
てよしなき山中に逗留す
蚤虱馬の尿する枕もと
あるじの云是より出羽の国
大山を隔て道さだかならざ
れば道しるべの人を頼て越へ
きよしを申さらばと云て人を
頼侍れば究竟の若者反脇指
をよこたえ樫の杖を携て我々が
先に立て行けふこそ必あや
うきめにもあふべき日なれと
辛き思ひをなして後について
行あるじの云にたがはず高山
森々として一鳥声きかず木の
下闇茂りあひて夜る行がごとし

雲端につちふる心地して
篠の中踏分〱水をわたり岩
に蹶て肌につめたき汗を流
して最上の庄に出つかの
案内せしをのこの云やう此みち
必不用の事有恙なうおくり
まいらせて仕合したりとよろこひて
わかれぬ跡に聞てさへ胸とゞろく
のみ也

尾花澤にて清風と云者を尋
ぬかれは冨るものなれとも志いや
しからす都にも折々かよひてさ
すかに旅の情をも知たれは日比
とゝめて長途のいたはりさま〳〵
もてなし侍る

涼しさを我宿にしてねまる也

這出よかひやが下のひきの声

まゆはきを俤にして紅粉の花

蚕飼する人は古代のすがた哉　曾良

山形領に立石寺と云山寺あり
慈覚大師の開基にして殊清
閑の地也一見すへきよし人々の
すゝむるに依て尾花沢より
とつて返し其間七里ばかり也
日いまだ暮す麓の坊に宿かり
置て山上の堂にのぼる岩に
巌を重て山とし松栢年旧
土石老て苔滑に岩上の院々
扉を閉て物の音きこえす岸
をめくり岩を這て仏閣を拝
佳景寂寞として心すみ行のみおほゆ

閑さや岩にしみ入蝉の声

最上川のらんと大石田と云所
日和を待爰に古き誹諧の種
こぼれて忘れぬ花のむかしをした
ひ芦角一声の心をやはらげ
此道にさぐりあしして新古ふた
道にふみまよふといへどもみち
しるべする人しなければと
わりなき一巻残しぬこのたびの風流

爰に至れり
最上川はみちのくより出て山形
を水上とすこてんはやぶさなど
云おそろしき難所有板敷山の北
を流て果は酒田の海に入左右山
覆ひ茂みの中に船を下すこれ
に稲つみたるをやいな船といふならし
白糸の滝は青葉の隙々に落て

仙人堂岸に臨て立 水みな
ぎつて舟あやうし
　五月雨をあつめて早し最上川
六月三日羽黒山に登る図司左吉
と云者を尋て 別当代会覚阿
闍利に謁す南谷の別院に舎して
憐愍の情こまやかに
あるじせらる

四日本坊にをゐて誹諧興行
　有難や雪をかほらす南谷
五日権現に詣当山開闢能除
大師はいつれの代の人と云事を
しらす延喜式に羽州里山の神
社と有書写黒の字を里山と
なせるにや羽州黒山を中略し
て羽黒山と云にや出羽といへるも

五月雨をあつめて早し最上川

六月三日羽黒山に登る図司左吉
と云者を尋て　別当代会覚阿
闍梨に謁す南谷の別院に
舎して憐愍の情こまやかに
あるじせらる

四日本坊にをゐて誹諧興行

有難や雪をかほらす南谷

五日権現に詣当山開闢能除
大師はいつれの代の人と云事を
しらす延喜式に羽州里山の神
社と有書写黒の字を里山と
なせるにや羽州黒山を中略し
て羽黒山と云にや出羽といへる

鳥の毛羽を此国の貢に献ると
風土記に侍とやらん月山湯殿
を合て三山とす当寺武江東
叡に属して天台止観の月明
らかに円頓融通の法の灯かゝけ
そひて僧坊棟をならへ修験
行法を励し霊山霊地の験
効人貴且恐る繁栄長にして

めて度御山と謂つへし
八日月山にのほる木綿しめ身
に引かけ宝冠に頭を包強力
と云ものに道ひかれて雲霧山
気の中に氷雪を踏てのほる
事八里更に日月行道の雲関
に入かとあやしまれ息絶身こゝえ
て頂上に臻れは日没て月顕る

笹を敷篠を枕として臥て
明るを待日出て雲消れは
湯殿に下る
谷の傍に鍛冶小屋と云有此国の
鍛冶霊水を撰て爰に潔斎
して劔を打終月山と銘を切
て世に賞せらる彼龍泉に劔
を淬とかや干将莫耶のむかしを

したふ道に堪能の執あさからぬ
事しられたり岩に腰かけて
しはしやすらふほと三尺はかりなる
桜のつほみ半はひらけるありふり
積雪の下に埋て春を忘れぬ
遅さくらの花の心わりなし炎天の
梅花爰にかほるかことし行尊
僧正の歌の哀も爰に思ひ出て

惣而此山中の
微細行者の法式として他言する
事を禁ず仍て筆をとゞめて記さず
坊に帰れば阿闍梨の需に依て
三山順礼の句々短冊に書

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峰幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山銭ふむ道の泪かな　曾良

羽黒を立て鶴か岡の城下長山
氏重行といふ物のふの家にむかへ
られて誹諧一巻有左吉も共に
送りぬ川舟に乗て酒田の湊
に下る淵庵不玉と云医師の許
を宿とす

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

猶まさりて覚ゆ惣て此山中の微細行者の法式として他言する事を禁す仍て筆をとゝめて記さす坊に帰れは阿闍梨の需に依て三山順礼の句々短冊に書

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩て月の山

語られぬ湯殿にぬらす袂かな

湯殿山銭ふむ道の泪かな　曾良

羽黒を立て鶴か岡の城下長山氏重行と云もののふの家にむかへられて誹諧一巻有左吉も共に送りぬ川舟に乗て酒田の湊に下る淵庵不玉と云医師の許を宿とす

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

暑き日を海にいれたり最上川

江山水陸の風光数を尽して
今象潟に方寸を責む酒田の湊
より東北の方山を越礒を伝ひ
いさごをふみて其際十里日影
やゝかたぶく比汐風真砂を吹上
雨朦朧として鳥海の山かくる
闇中に莫作して雨も又奇也と
せば雨後の晴色又頼もしきと蜑
の苫屋に膝をいれて雨の晴
を待其朝天能霽て朝日はなやかに
さし出る程に象潟に舟をうかぶ
先能因嶋に舟をよせて
三年幽居の跡をとふらひむかふ
の岸に舟をあかれは花の上こくと
よまれし桜の老木西行法師の

神功后宮の御墓
を干満珠寺と云此処に行幸
ありし事いまだ聞ずいかなる
事にや此寺の方丈に坐して
簾を捲ば風景一眼の中に
尽て南に鳥海天をさゝえ
其陰うつりて江にあり西ハむや〳〵

の関路をかぎり東に堤を築て
秋田にかよふ道遥に海北にかま
えて浪打入る所を汐こしと
云江の縦横一里ばかり俤松嶋に
かよひて又異なり松嶋ハ笑ふが
如く象潟ハうらむがごとし寂し
さに悲しみをくはえて地勢魂
をなやますに似たり

の記念をのこす江上に御陵
あり神功后宮の御墓と云寺
を干満珠寺と云此処に行幸
ありし事いまだ聞ずいかなる
事にや此寺の方丈に座して
簾を捲ば風景一眼の中に
尽て南に鳥海天をさゝえ
其陰うつりて江にあり西ハむやむや

の関路をかぎり東に堤を築て
秋田にかよふ道遥に海北にかま
えて浪打入る所を汐こしと
云江の縦横一里ばかり俤松島に
かよひて又異なり松島ハ笑ふが
如く象潟ハうらむがごとし寂
しさにかなしみをくはへて地勢魂
をなやますに似たり

象潟や雨に西施がねぶの花
汐越や鶴はぎぬれて海涼し
　祭礼
象潟や料理何くふ神祭　曾良
　　　　　みのの国の商人低耳
蜑の家や戸板を敷て夕涼
　岩上に雎鳩の巣をみる
波こえぬ契ありてやみさごの巣　曾良

酒田の余波日を重て北陸道の
雲に望遥々のおもひ胸をいた
ましめて加賀の府まで百卅里
と聞鼠の関をこゆれば越後
の地に歩行を改て越中の
国一ぶりの関に到る此間九日
暑湿の労に神をなやまし
病おこりて事をしるさず

文月や六日も常の夜には似す
荒海や佐渡によこたふ天の河
今日ハ親しらす子しらす犬もとり
駒かへしなと云北国一の難所を
越てつかれ侍れハ枕引よせて
寝たるに一間隔て面の方に
若き女の声二人計ときこゆ
年老たるおのこの声も交て

物語するをきけハ越後の国新
潟と云所の遊女成し伊勢参宮
するとて此関まておのこ送りて
あすハ古郷にかへす文したゝめて
はかなき言伝なとしやる也白浪
のよする汀に身をはふらかし
あまのこの世をあさましう下りて
定めなき契日々の業因いか

いかにつたなしと物云をきく〳〵
寐入てあした旅立に我々に
むかひて行衛しらぬ旅路の
うさあまりおぼつかなう悲しく
侍れば見えがくれにも御跡をした
ひ侍らん衣の上の御情に大慈の
めぐみをたれて結縁せさせ給へ
と泪を落す不便の事には侍れ

ども我々は所々にてとゞまる
方おほし只人の行にまかせて
行べし神明の加護かならず
恙なかるべしと云捨て出つゝ
哀さしばらくやまざりけらし

一家に遊女もねたり萩と月

曽良にかたれば書とゞめ侍る
くろべ四十八が瀬とかや数しらぬ

侍れども、ふしくハあそしくにこ
去る方ありし此人のりはよか
かへりつゝし神明の加護うすき
兼ねつるくしと捨てたつ
兼ねこそくやあましく
一家には遊女もあまた有と月
影良まきれて書とめ侍れ
くろへ候十八の歌とぞや拾し

此川をわたりて那古と云浦に
生擔籠の藤浪ハ春ならすとも
初秋の哀とふへきものをと
人にたつぬれハ是より五里いそ
伝ひしてむかふの山陰にいり
蜑の苫ふきかすかなれハ蘆
の一夜の宿かすものあるましと
いひおとされてかゝの国に入

わせの香や
　分入右ハ有そ海

卯の花山くりからか谷をこえて
金沢ハ七月中の五日也爰に
大坂よりかよふ商人何處と云者
有それか旅宿をともにす
一笑と云ものハ此道にすける名の
ほのかに聞えて世に知人も侍し
に去年の冬早世したりとて

其兄追善を催すに

塚も動け我泣声ハ秋の風

ある草庵にいざなはれて

秋涼し手毎にむけや瓜茄子

途中唫

あか〳〵と日ハ難面もあきの風

小松と云所にて

しほらしき名や小松吹萩すゝき

此所太田の神社に詣実盛の
甲錦の切あり往昔源氏に
属せし時義朝公より給はらせ給
とかやげにも平士のものにあらず
目庇より吹返しまで菊から
草のほりもの金をちりばめ龍に
鍬形打たり実盛討死の後
木曾義仲願状にそへて此社

こめられ侍よし樋口の次郎
が使せし事ともまのあたり
縁起にみえたり
むざんやな甲の下のきりぎりす
山中の温泉に行ほど白根
が嶽跡にみなしてあゆむ
左の山際に観音堂あり花
山の法皇三十三所の順礼

とげさせ給ひて後大慈大悲
の像を安置し給ひて那谷
と名付給ふや那智谷組の
二字をわかち侍しとぞ奇
石さまざまに古松植ならべて
萱ぶきの小堂岩の上に
造りかけて殊勝の土地也
石山の石より白し秋の風

温泉に浴す其功有明に次と
云
山中や菊ハたをらぬ湯の匂
あるじとする物ハ久米之助とて
いまだ小童也かれが父俳諧を
好み洛の貞室若輩のむかし
爰に来りし比風雅に辱し
められて洛に帰て貞徳の門人
となつて世にしらる功名の
後此一村判詞の料を請ず
と云今更むかし語とはなりぬ
曾良ハ腹を病て伊勢の
国長嶋と云所にゆかりあれ
ば先立て行に
行〳〵てたふれ伏とも萩の原　曾良
とかき置たり行ものゝ

るものゝうらみ隻鳧のわかれて
雲にまよふかことし予も又
今日よりや書付消さん笠の露
大聖持の城外全昌寺といふ
寺にとまる猶加賀の地也
曽良も前の夜此寺に泊て
終宵秋風聞やうらの山
と残す一夜の隔千里に同し

吾も秋風を聞て衆寮に
臥は明ほのゝ空ちかう読経
声すむまゝに鐘板鳴て
食堂に入けふは越前の国
へと心早卒にして堂下に
下るを若き僧とも紙硯を
かゝへ階のもとまて追来る
折節庭中の柳ちれは

一 庭掃て出はや寺にちる柳
とりあへぬさましにて草鞋なから
書捨つ越前の境吉崎
の入江を舟に棹して汐
越の松を尋ぬ
終宵嵐に波をはこはせて
月をたれたる汐越の松 西行
此一首にて数景尽たり

一辧を加るものは無用の指
を立るかことし
丸岡天龍寺の長老古き因
あれは尋ぬ又金沢の北枝
といふものかりそめに見送りて
此処まてしたひ来る所々の
風景過さす思ひつゝけて
折節あはれなる作意なと

ゆ今既別にのぞみて
物かきて扇引さく余波哉
五十丁山に入て永平寺を礼
す道元禅師の御寺也邦機
千里を避てかゝる山陰に
跡をのこし給ふも貴きゆへ
有とかや
福井は三里計なれは夕飯

したゝめて出るにたそかれの
路たどたどし爰に等栽と
云古き隠士有いつれの年に
か江戸に来りて予を尋遥
十とせ余り也いかに老さらぼひ
て有にや将死けるにやと人に
尋侍れはいまた存命してそこ
そこと教ゆ市中ひそかに

引のてあ帀しのやなしく夕白
急らさのうえしみて露臥て
ましょうかとをうくすきれハ
此うちにありし門を排て徳
こもるる女の出ていつより
わらわ上及心の法師やあきし八
此あつ何りしきりのうまれ
めりしおあくる與かへとらよ

うれしあまりしくちころ
むかしゆかりのたにうち訛
根いなれてやらしあわれ
其のわかりニ夜とまりて
名月いつまでみるとりと
まひ立筆執し芳しまうくと
経岸しるかなし給の栓
叔しう札立衛方根ヶ嶽

うかれて比那か嵩かくるゝ
あさむつの橋をわたりて玉江
の芦は穂に出にけり鶯
の関を過て湯尾峠を
越れは燧か城かへるやまに
初雁を聞て十四日の夕
くれつるかの津に宿を
もとむその夜月殊晴たり

あすの夜もかくあるへきにや
といへは越路の習ひ猶明
夜の陰晴はかりかたし
とあるしに酒すゝめられてけいの明神
に夜参す仲哀天皇の御
廟也社頭神さひて松の木
の間に月のもり入たる
おまへの白砂霜を敷るかことし

往昔遊行二世の上人大願
發起のことありてみつから草
を刈土石を荷ひ泥渟を
かはかせて参詣往来の煩
なし古例今にたえす神前
に真砂を荷ひ給ふこれを
遊行の砂持と申侍ると亭主
のかたりける

月清し遊行のもてる砂の上

十五日亭主の詞にたかはす
雨降

名月や北国日和定なき

十六日空霽たれはますほの
小貝ひろはんと種の濱に舟
を走す海上七里あり天屋何某
と云もの破籠小竹筒なとこまやかに

やかにしたゝめさせ僕あまた
舟にとりのせて追風時の
まに吹着ぬ浜はわづかなる
海士の小家にて侘し
き法花寺あり爰に茶を飲
酒をあたゝめて夕ぐれの
さびしさ感に堪たり
寂しさや須磨にかちたる浜の秋

浪の間や小貝にまじる萩の塵
其日のあらまし 等栽に
筆をとらせて寺に残す
露通も此みなとまで出む
かひてみのゝ国へと伴ふ
駒にたすけられて大垣の庄
に入ば曾良も伊勢より
来り合越人も馬をとばせ

て如行が家に入集る前
川子荊口父子其外したし
き人々日夜とぶらひて蘇
生のものにあふがごとく且
悦び且いたはる旅の物うさ
もいまだやまざるに長月
六日になれば伊勢の遷宮
おがまんと又舟にのりて

蛤の
ふたみに
わかれ行
秋ぞ

此一書ハ芭蕉翁奥羽乃紀行にして自
素竜ニ筆也書乃縦五寸五歩横寸
七歩紙の重ね十二乙前尾に白紙を加ふ
外題ハ素龍が彼是一紙略記して紙の表
紙ハ紫乃糸にて表紙ハ金の吉祥ちらし色
る白地にたくのひろ乃と自筆にて書
て酒身し後に遷化の後門人去来ニ
伝ふる也又去来の書門人野坡に伝

まこと筆格は書たる文章にて相違なく

今古集りし所に於て採用せられたるや

京寺町二条上ル町
井筒屋庄兵衛板

皇學館 短大 圖書 65211 昭36. 3. 14 受入